



## ～健苗育成で活着・初期生育の確保を!～

5月の作業目標 ～健苗に仕上げて適正な栽植密度で田植え～

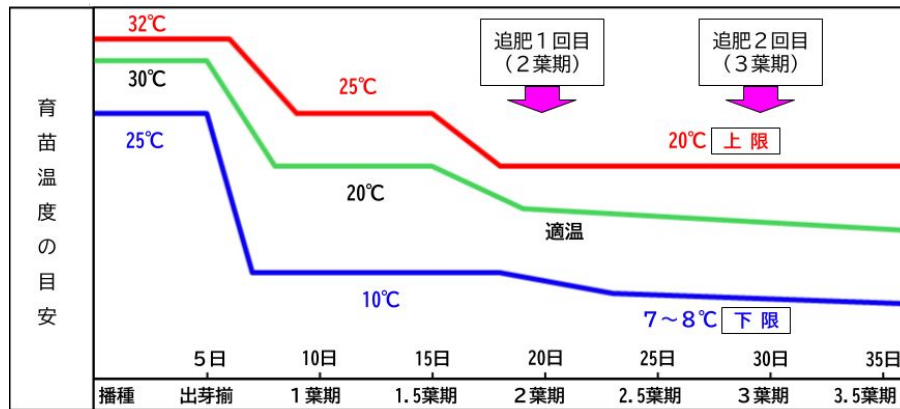


図 育苗管理温度の目安 (中苗)

## 育苗管理 ～後半は外気に慣らして、硬く仕上げよう～

- 東北地方の1か月予報（仙台管区气象台 4/9発表）では、向こう1か月（4/11-5/10）の気温は高く、降水量、日照時間は平年並の予報です。特に期間の前半は、気温がかなり高くなる予報です。ハウス内の気温に気をつけて育苗管理を行ってください。
- かん水は、朝または午前中に1回のかん水量を多くし、散布回数をできるだけ少なくします。ただし、育苗後半は苗が大きくなり箱内が乾きやすくなるので、床土が白く乾いたり葉が巻き始めた場合には、気温の低いタイミングで応急的にかん水します。
- 通気管理は通常1葉期頃から行い、1.5葉期以降は徐々に外気へ慣らします。移植1週間前頃からは低温日でない限り夜間もハウスを開放して外気にあて、硬い苗を育てます。
- 2葉期以降に葉色が薄くなった場合は、1～2回程度、液肥等で追肥を行います（窒素成分で箱当たり1g）。また、施用後は散水により葉身についた肥料を洗い落としてください。
- 葉色が濃い場合や、ロング肥料を使用した場合は追肥を控えます。

## 本田準備・田植え ～田植えは極度の低温時は避ける～

- 耕起では耕深15cm以上を目指し、無理のない速度での作業を心がけましょう。過度な高速作業を行うと十分な作土層を確保できず、根張りが悪くなります。
- 代かきは浅水状態で浅めに行います。過剰な代かきのかえって水はけを悪くし、ガスわきや表層剥離の発生原因になるため、代かきの回数を2回以内に抑え、下層にある程度荒い土塊が残るような状態に仕上げましょう。
- 田植えは、低温や強風下で行うと植え傷みが大きく、その後の活着不良や初期生育の遅れにつながるため、悪天候下での無理な田植えは行わないようにします。
- 強勢茎主体に穂数を確保するためには栽植密度70株/坪（21.2株/m<sup>2</sup>）以上を基本とします。50株/坪以下の疎植は、天候不良年では茎数不足のリスクが高まります。
- 植え付け本数は4本/株程度とし、3cm以上の深植えにならないようにします。
- 田植え直後は活着を促進させるため、水深4cm程度の湛水状態とし、保温に努めましょう（活着には4～5日かかりますが、気温・水温が高いほど早まります）。
- 田植え晩限は、5月末と考えられます。特に中晩性品種の遅植えは、出穂期が遅れ、登熟不良が懸念されますので、注意してください。

## いもち病対策 ～基本は育苗期いもち及び葉いもち防除の徹底～

### 【薬剤による防除】

○育苗期いもち防除：次のいずれかにより防除

ベンレート水和剤		ビームゾル
播種時～播種14日後	播種時～播種7日後頃	緑化始期
500倍液	1,000倍液	500倍液
500ml/箱	1,000ml/箱	500ml/箱

○葉いもち防除：次のいずれかにより防除



育苗期箱施用剤	側条施用剤		水面施用剤
・床土混和 ・移植3日前～移植当日散布 他	・移植時 (ペースト肥料混和)	・移植時 (移植同時施薬機を用いて 側条施用)	6月15日頃 (6月12～18日)
ルーチンバリアード箱粒剤 ルーチンアドスピノ箱粒剤 ブーンパディート箱粒剤 他	側条オリゼメートフェルテラ 顆粒水和剤	ブーンパディート箱粒剤 他	オリゼメート粒剤
50g/箱 他	500g/10a	1kg/10a 他	2kg/10a

※薬剤により、使用時期、使用量が異なるため、必ずラベルを確認してください。

※水稲育苗終了後にハウスに野菜類を作付けする予定があり、育苗箱施用剤を移植前～当日に使用する場合は、育苗ハウスの外で薬剤を使用してください。

※高密度播種（乾糶200～300g/箱程度）で育苗箱施用剤を使用する場合は、本田10a当たりの投入量に換算した量を施用してください（高密度に播種する場合の登録がある剤に限る）。

### 【耕種的防除】

○ほ場に放置された補植用の余り苗は、葉いもちの強力な伝染源となるため、補植終了後はただちに水田の泥の中に埋めるなどして完全に処分してください。

○乾燥状態で越冬した稲わら・籾殻は、葉いもちの伝染源となるので、ほ場周辺に放置しないでください。なお、敷わらを使用した野菜ほ場の周辺では、葉いもちの早期発生に注意してください。

## ごま葉枯病対策 ～砂質で「秋落ち」するほ場はマンガン質肥料の施用を～

○砂質で「秋落ち」が発生しやすい水田では、マンガン不足によりごま葉枯病に罹病しやすくなります。マンガン質肥料を施用することで発生を抑制でき、その効果は少なくとも3年間持続します。

○薬剤防除については、育苗箱施用剤にいもち病と併せて「穂枯れ（ごま葉枯病菌）」に登録のある薬剤を選択してください。なお、幼穂形成期から穂ばらみ期にかけてごま葉枯病の発生が見られた場合には、出穂直前と穂揃期に、ブラシフロアブルまたはノンブラスフロアブルの1,000倍液を100～150L/10a散布してください。

## 除草対策 ～一発処理剤単用する場合は代かきから10日後までを目安に～

○一発処理除草剤の多くは、ノビエ限界葉齢が2.5～3.0葉となっていますが、効果安定のために、2葉期までの散布が望ましいです。目安として、代かきから10日以内の一発処理剤の散布が効果的です。

○除草剤散布時の水深は、粒剤で3～5cm、フロアブル剤やジャンボ剤、豆つぶ剤等の水中拡散性の剤では5～7cmとし、薬剤が拡散しやすいように水深を確保します。

○除草剤散布後7日間は止水とします。田面が露出すると効果が低下するため、水が少なくなってきたらゆっくりとかん水します。

○水田周辺の水系など環境に配慮し、移植前に初期剤は使用しないでください。雑草の発生が多いと予想される場合は、移植後の初期剤と一発処理除草剤の体系処理を行ってください。

○高密度播種苗では苗質が軟弱徒長傾向にあるため、除草剤の影響を受けやすくなります。田植同時処理を行う場合は、初期剤を使用し、初期剤散布後10～14日後（ノビエ2.0葉期まで）に一発処理除草剤を使用する体系処理を行うことで、初期生育が安定し、高い除草効果が期待出来ます。

今年度の稲作技術情報の発行スケジュール ※予定のため変更になる場合があります。

No. 552	No. 553	No. 554	No. 555	No. 556	No. 557	No. 558	No. 559	No. 560
5月25日	6月11日	6月26日	7月7日	7月17日	7月24日	8月24日	12月21日	3月22日